

「昭和10年代の東京商大」<sup>1</sup>

水田 洋

(水田洋) 岩崎利一は米谷隆三がほれて、どうしても後継者にしたいと言ったんだけど、おやじが断固譲らなかった。これはうちの跡取りだと言って<sup>2</sup>。そういうような関係。だから学年は2年上だと思う。

(西沢保) 米谷さんはパージされたんですよね。

(水田) ええ。だって『ファシスタ教本』を書いたんだもの。

(西沢) 『ファシスタ教本』を書いた。

(水田) うん。

(渡辺雅男) あの人はイタリアに行ったんですね。

(水田) 行った。

(渡辺) ムッソリーニに会ってきた。

(水田) そう。

(西沢) でも、それはあの方の本業ではないですよね。

(水田) いや、彼は本業のつもりだろうな。

(西沢) そうなんですか。

(水田) それは本当に情熱的に語っていた。あれが出たときは抱いて寝るんだと言っていた。だからトキピン〔常盤敏太〕と並んでいるけど、まったく体質は違う。縦に展開するのは忠義・奉公で、横に展開するのは義理・人情とかという。それはここで書いてあるんだけど、もう何回も聞かされた。

---

<sup>1</sup> 当日の参加者は、水田洋・西沢保・渡辺雅男・大月康弘・江夏由樹・金沢幾子・土肥恒之・山内進・福田名津子・杉岳志(発言の順)の10名。

<sup>2</sup> 岩崎は銀座にある老舗眼鏡屋の長男であった。

(西沢) では、そろそろ。

(大月康弘) そうか、資料を今ですか。

(渡辺) 口火を切る必要もないくらいに、もう盛り上がっていますね(笑)。

(大月) もう、今(笑)。もうすでにいろいろとお話を承っているところで、すみません。

(渡辺) いや、せっかくの機会ですから、先生のお話を引き出すために、その当時の雰囲気を少し思い出していただくと思って、いかに水田先生が学生時代、つまり高島先生の下で学んでいたときの一橋が、恐怖に満ちていたかということをおそらくこれは高島先生もご存じないまま亡くなったわけです。

(水田) そうね。

(渡辺) 少しそこをお話ししようと思ったんです。「幻の東京商大事件」と、私が勝手にタイトルを付けたんです。そして、そのあと、第二の話題として、高島さんの夢は「市民社会論の現代化」だったはずなんですけど、これがどうして未完で終わったのかという、未完の構想、その理由について。ですから、歴史的な事実関係についての話題提供と理論的な問題提起と、この2つをお話しして前座を務めたいと思ったわけです。

じゃあ、まず「幻の東京商大事件」から。1つの資料を紹介して、その資料紹介の中で、実はこの「事件」が横浜事件と深い関連があるんだということをお話ししたいと思います。両者を結び付けるものはいったい何か。しかし、こちらの事件は横浜事件にはならなかったわけですから、結局、幻に終わったわけで、それはなぜだったのか。しかし、もし幻でなかったとしたら、おそらく水田先生はこの世にいなかったはずで、獄死、まず間違いなく拷問死しているというくらいの、恐怖の顛末をお話ししたいと思います。

まず1つの資料を紹介します。こういう資料が見つかったんです。「マルクス学説の再台頭、東京商科大学教授高島善哉氏著「統制経済の論理と倫理」研究」というパンフレットです。精神科学研究所が発行した、これは非売品のパンフレットです。今現在、国会図書館にあります。発見したのは、高島さんの評伝を書いた上岡修さんです。

これの最初の書き出しを読むと、愕然とするんですね。その「序文」に曰く、「さきに細川嘉六氏の「世界史の動向と日本」について、それがレーニン著『帝国主義論』の新版にすぎぬことを指摘したが、執拗にも尚マルクス理論は今日大東亜戦下の思想界より跡を絶っていない。東京商大教授が嚮を並べて執筆している『総力戦経済の理論』(東京商大一橋新聞部編昭和17年11月15日発行)の中に収められた、高島善哉氏の「統制経済の論理と倫理」もそれで、マルクス経済学が巧妙に粉飾されているのを見出すので、ふたたびその主張を出来る限り詳細に分析し、識者の御参考に供したいと思う。」

この序文の冒頭、細川嘉六の論文「世界史の動向と日本」が引き合いに出されているところでピンときます。戦時下、日本共産党再建の謀議を行ったとされて、泊会議なるものが神奈川県の特高によりでっち上げられますが、その横浜事件の発端となったのがまさに細川嘉六氏のこの論文であり、それを最初に告発したのが、この一号前に発行されたパンフレットだったのです。また、この高島告発のパンフレットが昭和 18 年 1 月 20 日という日付で発行されていたことに注意してください。発行は、精神科学研究所、平河町にあった団体です。これはいったいどういう研究所だったのでしょうか。

その前に横浜事件について、ちょっとおさらいをしてみたいんですけども、これは皆さんご存じのように、戦時下の有名な言論弾圧事件です。『改造』に掲載された細川嘉六氏の先ほどの論文が、治安維持法違反ということで目を付けられて、細川が検挙されると、これを発端にして、10 人ほどが神奈川県警の特高に逮捕されて、獄死者 4 人を出すわけです。商大関係者も何人かおられます。戦後、再審請求を繰り返して、再審が開始されることになりましたが、最終的には裁判打ち切りの免訴が確定しました。

さて、先の高島弾劾のパンフレットでも触れられ、横浜事件の露払いの役目を果たしたのが、同じ精神科学研究所から先行して発行されていた非売品のパンフレットです。「新帝国主義論の横行」と題され、「細川嘉六氏の「世界史の動向と日本」について」と副題を付されております。

この冒頭の書き出しは以下のとおりです。「細川嘉六氏の前記論文は全くレーニン『帝国主義論』の焼き直しであるので、この点を更に批判することにした。氏は著名のマルキストであり、嘗て大原社会問題研究所に於いて研究を続けた当時、河上肇氏が、櫛田民蔵につぐ優れたマルクス主義学者と推賞していたものである。」細川をこう告発して、彼の論文が偽装せるレーニン『帝国主義論』だと論難しております。

これを発行した精神科学研究所は、民間の研究団体で、昭和 17 年 6 月には研究所の要綱を発表して、当時華々しい活動を行っておりました。財界からもかなりの資金が流れていたようです。要綱によれば、研究所の理事の一人に小田村寅二郎という人物がおります。彼は当時の右翼の学生運動<sup>3</sup>を立ち上げて、東大の肅学運動を行っていました。河合栄治郎を陥れようとして、彼の授業で発言し、公開質問状を彼に突き付けたりしています。小田村は、東大にいるリベラルな教授を学生の側から告発する運動を繰り返して、拳句、大学からは退学処分を受けますが、全国的にはその名を鳴り轟かせていました。とくに、昭信会、その後身である日本学生協会の影響力は、当時、一橋にも及んでいたようで、同協会が組織した信州菅平の 5 日間合宿に参加した一橋の学生もいた<sup>4</sup>ようで、また、当時の学園における右翼学生運動の状況については、大崎平八郎『戦中派からの遺言』<sup>5</sup>に、日本学生協会の運動に参加した東京商科大学の「親友 S (佐々木哲郎) 君」についての記述があります。精神科学研究所というのは、学生右翼運動の中心人物が理事を務める、そういう団体だったんです。

理事長となって、この研究所を率いていたのが田所広泰という人物ですが、彼は、蓑田胸喜と肩を並

<sup>3</sup> 一高昭信会、東大精神科学研究会。

<sup>4</sup> 参加者本人の回想としては、兼子春三「わが思想の遍歴」十二月クラブ編『東京商科大学学部 昭和十六年後期卒業 50 周年記念 波濤 第 2』<http://jfn.josuikai.net/nendokai/dec-club/hatou2/naiyou/kanekoshun.htm>

<sup>5</sup> こぶし書房、2005 年、146～150 頁。

べる、また実際彼と密接な関係を保った当時のウルトラナショナリストです。蓑田胸喜は、ご存知のように原理日本社を起こして『原理日本』という雑誌を発行していた人物であり、京都帝大、東京帝大の自由主義的教授を告発して、滝川事件、天皇機関説問題のきっかけを作ったことで有名です。その蓑田と連携しながら、田所広泰は精神科学研究所を主宰していました。

さて、横浜事件については先に少し触れましたが、その摘発のいきさつを振り返っておきましょう。1942年（昭和17年）に『改造』に、先ほど申し上げた細川論文が掲載されます。するとその直後の8月26日に精神科学研究所の告発パンフが出るんです。それを受けて9月6日には、六日会、これは陸軍省がやっている定例会で、情報将校が出版社を集めて、毎月6日に開かれる、軍とジャーナリズムとの談合の会です。そこで情報将校の平櫛孝少佐が、こんな論文はけしからんと、まず口火を切ります。これを受けてすぐ9月11日には神奈川県警が、川田寿、これはアメリカ帰りの労働問題研究者で、戦後慶応大学の教授として有名になった方ですけども、その先生夫妻を検挙します。そしてその川田寿のグループ全体を翌年1月までの間につぎつぎと検挙する。

陸軍に火を付けられて神奈川県警が動いたのを受けて、9月14日にはすぐに日本読書新聞で谷萩那華雄という大佐〔大本営陸軍報道部長〕が、内務省警保局や情報局といった検閲当局の手抜きを批判して、さらにこの動きを煽るんです。そうすると警視庁の特高が神奈川県警とは別に動いて、細川嘉六を検挙し、世田谷署に留置する。

一橋関係でいうと、当時横浜商専<sup>6</sup>にいた早瀬利雄ですか。

（水田） ワイ専だった。

（渡辺） 早瀬は、当時すでに要観察で、要するに特高の監視下にあるんですけど、9月末、神奈川の特高は彼を神奈川署に呼び出して、目の前にいくつかの論文を細川論文と一緒に並べ、早瀬に読ませるんです。そしてその反応を見るんです。この中で優秀な論文はどれだと彼に尋ね、それとは知らない早瀬が当然細川論文を第一位に挙げますね。そうすると「やはりそうか」と叫んで、特高としては、左翼と一脈通じている論文だという確証が得られたということで、はっきりと立件するという方向へ進むらしいんです<sup>7</sup>。神奈川県警は警視庁に細川の身柄の引渡しを求め、1943（昭和18）年の5月には細川グループの一斉検挙があって、横浜事件が大々的に立件されるという、そういう流れになっています。

ですから、この精神科学研究所の告発パンフレットの発行は、陸軍省と情報局、検閲当局との非常に密接な連携プレーが背景にあって行なわれたものと言えるでしょう。こうなりますと、高島告発パンフレットが発行されたということは、次のターゲットが横浜から商大に移ったと考えて間違いなく、また、あのパンフレット自体も、「われわれは先に細川嘉六を弾劾したが、今度は高島だ」と言っているわけですから、商大事件が引き起こされる可能性はたしかに高かったのではないかと思うんです。

11月15日に高島論文が発行されて、それを読んだ精神科学研究所が、もう1月24日にはパンフレットを出版しています。今のようにワープロのない時代ですから、活字を組んでいるはずですよ。かなり

<sup>6</sup> 横浜市立横浜商業専門学校（Y専）のこと。現在の横浜市立大学。

<sup>7</sup> 青木書店の広報誌「あおき」に発表した早瀬の回想「横浜事件」と私の証言」による。

の速いペースで原稿が書かれ、印刷に回して発行されたことになりますね。狙われた高島さんには大きな危険が身に迫っていたことになります。

ところが、ここに稀に見る偶然が訪れます。数週間と経ない1943年2月14日に憲兵隊による精神科学研究所の所員の斉検挙が始まるのです。戦争指導をめくり東條内閣批判まで口にする精神科学研究所はもはや当局にとって、ある一線を越えた存在となったのです。幹部十数人は百余日間拘留され、研究会〔精神科学研究所と学生協会〕の解散を条件に釈放されます<sup>8</sup>。こうして実際、10月には解散をさせられています。憲兵隊による斉検挙は、拷問を伴うかなり激しい弾圧だったと思われます。この際の勾留がもとで田所広泰は健康を損ね、その後病気がちになって、戦後すぐ亡くなります。

なぜ幻に終わったかということを考えてみたいと思います。横浜事件を担当したのは神奈川県の特高です。それに対して、警視庁の特高が本来なら商大を扱うわけですから、この2つの特高の違いは大きかったのではないかと思います。神奈川県警の場合には、横浜を管轄下に持っていますから、ゾルゲ事件との連想、つまりアメリカ帰りの共産主義スパイという連想がまず先に立ったはずで、横浜事件の発端は細川論文ですけれども、一番最初に手を付けるのはアメリカ帰りの川田寿です。あそこからやっっていくというのは、明らかにこのゾルゲ事件との連想が背景にあるということです。

それからもう1つは、実は横浜事件の場合には、昭和研究会、昭和塾、要するに近衛文麿の流れと、それから東條イコール平沼騏一郎という反近衛の流れ、要するに近衛と反近衛の中央における確執がどうも反映していたらしいのです。これは神奈川県知事<sup>9</sup>が反近衛だったこともあって、要するに近衛派と目されたりベラルな動きを叩こうということで、横浜事件がでっち上げられた。これまでもそうした陰謀説がかなりの説得力をもって唱えられています。そういう意味で言うならば、一橋の、しかも高島さんの背景には、こうした中央政界の政治的な力学はまったく反映していないわけです。ですからおそらく、こういうものに巻き込まれることがなかったということも1つの理由でしょう。

それからもう1つ、横浜事件が捏造された直接の原因は、やはり先ほど言った内務省情報局と陸軍報道部との派閥抗争です。これは別に路線がどうのこうのということじゃなくて、情報局を握っている新聞雑誌部長の松村秀逸と、陸軍報道部を握っている部長の谷萩那華雄との個人的な確執があって、それのとばっちりを横浜事件の場合は食ったということがあろうようです。

それから最後はやはり、間一髪で東京商大事件が幻に終わったのは、何といたって精神科学研究所が反東條派として粛清されたという事実が決定的です。この間一髪がなければ、おそらくどうなっていたか分からないでしょう。ですから、このお話の結論は、水田先生はかなり危ない橋を渡っていたんだということにして、その自覚はまったく水田先生にもないでしょうし、おそらく高島さんにもなかった。

(水田) ない、全然ない。

(渡辺) なかったし、水田先生にもないというわけですね。

<sup>8</sup> 竹内洋「帝大肅正運動の誕生・猛攻・蹉跌」『日本主義的教養の時代』柏書房、2006年。

<sup>9</sup> 近藤壤太郎。

(水田) 全体として危ないなというくらいの意識しかなかった。そんなに身に迫っているなんて全然考えない。

(渡辺) 夢想だにしなかった、ということですね。これでまず1つ目のお話を終わらせていただきます。

それから2つ目は、せっかく水田先生がいらっしゃっているので、これは私が社会学者として理論的関心から伺いたい問題です。「高島の夢、未完の構想」と題しました。長く助手を務めた上岡修氏によれば、高島先生はよくこう仰っていたというんです。「孤独ではあるけれども孤立ではない」と。僕の前で仰ったという記憶はないんですけど、もう1人の助手である上岡君の前ではそう言っていたということで、今度出た上岡君の高島さんの評伝は副題にこの言葉を掲げています<sup>10</sup>。

じゃあ、高島さんを「孤独」に追い込んだのはいったい何だったか。これを考えてみたいんです。要するに高島の夢は、先ほど言ったように、理論的に市民社会論を日本の中に定着させたい、市民社会論を現代的によみがえらせたいと、この一念だったと思うんです。そのために生産力理論だの、風土論だの、価値論だの、民族論だのと、いろいろなところを回り道したけれども、結局最後まで目指していたのはそこだったと思うんです。

その「市民社会の理論化」という目標がどうして達成できなかったのかということを考えてみたいわけです。つまり、それが高島の「孤立」という問題です。生涯のテーマ、市民社会論の現代化を夢に終わらせたものはなにか。誤解を恐れずに言えば、この夢を育てたのは一橋の学問だけれども、夢を夢に終わらせたのも、実は一橋の学問じゃないか、そんな反省をいささか述べたくて、あるいは、それに対する水田先生の反論を聞きたくて、お話しする気になりました。

私が感じている素朴な疑問とは、つぎのようなものです。私はずっと、なぜ T・H・マーシャルという人と高島さんが出会わなかったのか、疑問を感じてきました。イギリスにあれだけの造詣の深かった高島さん、そして門下からはイギリスについての高度な専門家を輩出し、水田先生をはじめとする多くの社会学者を周りに置きながら、ほぼ同じ時期にイギリスの学問世界で大きな影響力を持った T・H・マーシャルという、アルフレッド・マーシャルじゃありませんよ、T・H・マーシャルという戦後イギリス社会科学を代表する社会学者を高島さんが知る機会がなかったというのはどうしてなのだろう。

T・H・マーシャルという人はシティズンシップという概念をよみがえらせた人です。シティズンシップとは、これをわれわれは市民権と日本語に訳しますけれども、中身としては高島先生の言わんとする市民社会です。市民社会という言葉で探しても、なかなかイギリスの文脈ではヒットしないんですけども、シティズンシップということで探していけば、もうありとあらゆる分野でこの概念と遭遇するのです。その出どころはすべて、この T・H・マーシャルです。

じゃあ、なぜ高島さんはイギリスの社会科学の世界で戦後広く影響力をもつようになった、このシティズンシップの議論に学び、自己の問題意識を発展させようとしなかったのか。高島先生の口からシティズンシップという言葉も、T・H・マーシャルという名前も、あるいはイギリスの学問世界で定着しつつあったこのような議論についても、聞いたという記憶がありません。多分、高島先生はその動きをご

<sup>10</sup> 上岡修『高島善哉研究者への軌跡：孤独ではあるが孤立ではない』新評論、2010年。

存知なかった。また、高島先生を取り巻くお弟子さんたちの問題関心にも、このような議論は引っかかってこなかった。知っていれば、高島さんはそれをすぐに学んだでしょうし、その問題関心に励まされ、刺激を受け、理論的な突破口をそこに見出したのではないかと、私はずっと疑問に思っていたんです。もっともこれは私がイギリスへ行って、イギリスの戦後の社会科学に少し広く目を配って、初めて気が付いたことではあるんですけども。

これはT・H・マーシャルという人の写真です。代表作は『シティズンシップ・アンド・ソーシャル・クラス』という本で、ご覧になっているのは再版された、ポットモアへの紹介といえますか解説のついた版で、もともとは有名なレクチャーです。

その内容はといいますと、シティズンシップとは、ある共同体、あるコミュニティーの完全な成員に対して与えられる地位身分である、とまず定義します。そして、シティズンシップが歴史的に三つの段階を経て発展してきたことを述べます。市民的権利、ロッキンガム的な意味での市民権、それからそれが、労働者が参政権を持つようになって、政治的な権利としてのシティズンシップが認められる段階、そして戦後、ここからがT・H・マーシャルのユニークな主張ですが、戦後になってそうしたシティズンシップは、社会的な権利として、つまり社会権として発展したことです。すなわち、これはすべての人が平等に教育を受ける権利、医療を受ける権利、それから住宅を得る権利といった形で、福祉の基礎になってきたわけですね。そのような権利が社会権だということです。このようなシティズンシップの発展に裏打ちされて、戦後の福祉国家が成立した。ですから福祉国家論や社会政策学を勉強すると、必ずこの議論に出会うことになります。

とくに注目したいのは、T・H・マーシャルが、シティズンシップは階級を超えると主張したことです。これなどはまさに高島先生の問題意識と非常に大きく通じるころがあつて、ただ高島先生は、「超える」とは言わないんです。階級の立場と市民の立場は葛藤を演じながら同時併存すると、こう考えるのです。結論こそ違ふんですけども、しかし同じ土俵の上で同じ問題を、同じような概念を使いながら考えていたわけです。もし高島先生がこのような議論の存在に気がつけば、先生の日本での「孤独」感はかなり癒やされたのではないかと、そんなふうに思います。

さて、ここからが推論です。なぜそうだったのか。つまり、高島さんの学問的営みはなぜイギリスのこうした問題意識や議論と出会わなかったのか。一つは、高島さんがなによりも経済学者であったという点にあるかもしれません。経済学という狭い専門を突破することを目指しながらも、やはりその出自は経済学的であった。お弟子さんたちのほとんども、経済学者としての専門性を求め続けた。その結果、社会学、社会政策学、福祉国家論とか、そういった問題関心の学問的な広がりや方向性への目配りは限られてしまった。高島さんの議論の限界かもしれません。なぜそうした限界が生まれてしまったのかを考えると、高島さんの先生である福田徳三が持っていた広がり、幅の広さといえますか、経済学だけじゃなくて社会学もあれば社会政策学もある、福祉国家論の観点だって十分ある、そういう大きなものが、福田さんの死後、山田雄三さんの方へ福祉国家論が行ってしまい、それに対して自分の領域をある意味では確立するために、高島さんは独自の道を辿った。ご本人がどれだけ意識していたか分かりませんが、少なくとも弟子たちの世代になれば、福祉国家論なんていうのは、完全に高島シューレ〔学派〕から出てこないわけです。これが私が考える1つの根拠です。

残念ながら山田さんの場合も、ミュルダールには行ったけれども、イギリス的な市民社会論とか、あるいは、市民社会論の現代化とは言いませんし、市民権論、シティズンシップ論みたいのところへは行かなかったように思える。だから、ぽかっと空白ができてしまったのではないかな。

そのことを強く感じさせたのは、ここでぜひにこのお話を伺いたいんですけども、高島シュレーが徹底してこだわったのは市民社会という概念ですね。ところがイギリスへ行きますと、市民社会というのは独自の意味合いを持たされています。高島さん、あるいは高島シュレーが考えているような市民社会はないです。あのような含意では使いません。最近の例で言うなら、サッチャー政権の下で市民権がかなり制限され始めて初めて、権威主義的な社会体制になってようやく、市民社会のリベラルな含意みたいなものが見直され、評価されるようになりましたが、それ以前は市民社会はせいぜいオーソリタリアン国家に対する反発ぐらいの意味しかなくて、いくら市民社会という言葉を検索に入れても、イギリスの社会科学の現代的文脈のどこにもヒットしないのです。もちろんファーガソンとかアダム・スミスにはぶつかりますけど、そこから現代化しないんです。せいぜいミルあたりで止まっちゃう。これはどうしてだろうというのが大きな疑問です。

かつてミック〔Ronald L. Meek〕が来日したときに、このことをどなたかが彼に訊いたはずなんです。そうしたらミックが、市民社会という言葉はイギリス的文脈ではそういうふうには使わないと答えた。私はこの間亡くなった伯父の宮崎犀一からこのエピソードを聞いて知っているのですが、そのところを伺いたいと思っています。

結局これは日本の問題意識の、ある種のねじれではないかと思っています。市民社会を近代イギリス社会に固有のもの、歴史的に限定されたものと考えてしまう、丸山真男や大塚久雄や松下圭一などの一面的理解がいまだ通用している現状にも、あるいは、その逆に、そうした歴史的な市民社会像から理念型を救い出して、それを普遍化し、現代化しようと孤軍奮闘した高島さんの思い入れがいまだ理解されない現状にも、こうしたねじれが大きく影響を及ぼしているのではないかと思うのです。要するに高島さんが孤立していった背景にあったのは、こうした概念と、そこに込めた意味のズレではないかということなのです。さらに卑近な例を挙げれば、現在、日本のマスコミでは、市民社会にせよ市民にせよ、こうした言葉は、企業社会に対抗して使われています。市民というのは市民運動の世界を構成する概念であるというのが常識レベルの理解ですね。ところが、社会科学の世界で古典を勉強した上で市民社会を論じようとするれば、われわれは、国家と市民社会の分離と対立という問題意識で議論するわけです。この場合には、市民社会は企業社会を含んで存在するわけで、両者は別々に存在するわけではありません。明らかに社会科学的理解は、マスコミをはじめとする常識的理解とズレている。そんなことも結局、ある意味では高島さんの学問的、理論的孤立を促したのではないかという気がしております。ちょっと雑駁な問題提起ですけど、こんなところで前座を終わらせていただきます。

（大月） ありがとうございます。最初に今日お越しいただいたお礼等を申し上げるべきところを、いきなりいろいろとお話をさせていただきました。

（水田） だんだん大変なことになってきたなど。



(大月) 渡辺先生、どうもありがとうございました。

(渡辺) いいえ。

(大月) 先生方、皆さん、自己紹介等はお済みでいらっしゃいますか。

(江夏由樹) いや、まだです。

(大月) そうですか。そうしたら、すみません、自己紹介などをお願いできますでしょうか。お近いところから。

(金沢幾子) 金沢と申します。長くこちらの図書館に勤めておりまして、今、実践短大の非常勤講師をしております。細谷新治先生の背広ゼミといっても、もう遊び中心みたいなものですが、入っております。

(水田) そうすると、名古屋の女傑。

(金沢) 川原〔和子〕さん。

(水田) あれはご存じですね。

(金沢) はい。

(西沢) 経済研究所の西沢です。学会でいろいろお世話になっています。

(江夏) 経済学研究科の江夏由樹と申します。中国経済史です。

(大月) 渡辺館長の次の館長におなりです。

(土肥恒之) 私は今年の3月に社会学部を終わって、半年経っているんですけども、この大学ではヨーロッパ社会史です。ですから、先生は阿部謹也ですけど、その先生は上原専祿先生で、そういう話を聞けるかなと思って、よろしく願いいたします。

(山内進) 法学部の西洋法制史をやっている山内といいます。よろしく願いいたします。

(渡辺) 次期学長でいらっしゃいます。今副学長です。

(大月) 12月から。

(山内) 12月。

(水田) 大変だな。

(大月) 大月です。今日は本当にありがとうございます。よろしくお願いいたします。

(水田) 今、上原さんの名前が出てきたけど、上原さんの家に遊びに行っているとき、上原さんが教授会を終えて帰ってきて、それで今日の教授会で、学生協会を公認の団体と認めるかどうかという議論があって、自分はそれを否決してきたという、そういう話を。それがいつかな。

それで、その中には確か、その学生協会を支持する 学生協会って蓑田胸喜たちと直結でしょう。そういう純真な組織をどうして認めないんですかという教授の意見があった。上原さんは、そんなに純真なら皆さんお入りになったらどうですかということで、自分はつぶしてきたと、そういう話。かなりやっぱり、本当にはっきりしていました。

ちょっと飛びますけど、さっきの高島さんの論文は『統制経済』の雑誌から抜いたんじゃないですか。

(渡辺) そうです。

(水田) そうですね。あれが常盤敏太、あの人が主宰していて、それで米谷、常盤というのは両方とも右翼だったわけですけども、体質はまったく別で、それでその『統制経済』の雑誌が主催して、何か学会組織みたいなのができた。その交流会か何かで、峯村光郎という、戦後、公労委か何かに出たんじゃないか、慶応の人。その人が報告して、報告の途中、僕は高島さんに用事があって入った。そうしたらそのとき高島さんはささやいて、「史的唯物論だね」と。

だからやっぱり、そういう連帯に飢えているわけね、「ここにもいた」という感じで。まったく我々はそんな話は平気で、そういう公式はいつでも使っていたわけ。ただ、直接に具体的な問題になっていないから、ばくられないで済んでいるという、そういう状態ですから。

さっきのあの、早瀬さんが出てきたけれども、早瀬さんと会ったときに、横浜のバイパスの近くにインターナショナルというバーがあるので、今度飲みに行きましょうね、なんて言っていたら、その次にはばくられちゃったという、そんな感じ。だからもう全部、そういう考え方はほとんど一般的になっていたと言っていいんじゃないかと思います。

それから孤立というか、シヴィル・ソサエティーというのが出てきたんですけども、我々、特にその点では僕がいけないのかもしれないけれども、ファーガソンのシヴィル・ソサエティー概念だけを扱っていた。そして、要するに私有財産があって、それから政府ができれば、もうこれは市民社会なんだ

と。ファーガソンはその程度しか言っていないんだから、それをどう新しく解釈するかは別の問題だと。だから、まったくそのところに僕自身も閉じこもってしまったということ。

それから高島先生は、英語圏よりもドイツ語圏の方に親近感があったみたい。あるとき、「先生、英語とドイツ語どっちがいいですか」と言ったら、「ドイツ語だね」という。それで、それがテンニエスですよ。テンニエスという人はマルクスとホップズで、そこから『ゲゼルシャフトとゲマインシャフト』立ち上げた人ですから。僕のときにテキストとしてホップズの『リヴァイアサン』を使ったというのは、やっぱりそういう、そこでもう1回確認しようという意識があったんじゃないかと思います。

ただ、それが今の、現代の問題にどうしてもついていかなかったというのは、どうかな。例えば和田〔重司〕君なんか、シヴィル・ソサエティーが実際にあるかどうか見に行ったわけでしょう。それで、ないといってがっかりして帰ってきた。そこら辺でみんな弟子たちが、変な形でつぶれちゃったんじゃないかと思います。

（渡辺） その点、高島さんは晩年に至るまで、新憲法の中に市民社会があると。

（水田） そう。

（渡辺） 市民社会は戦後の新しい憲法の中に、これはもう理念としてあるんだと確信しているんですね。だからまったく動じない。

（水田） だから僕はそこら辺で止まっていて、それで実際にはニューレフトがこれを受け継いでいるんだというから、そこで市民社会という言葉を使ったことがありますけど、中身はやっぱり違うんだな。

（渡辺） イギリスの文脈だとシティズンシップという言葉がかなり大きな意味をもつのだけど、それは帝国主義の文脈においてそうなんです。帝国の市民としてシティズンシップを持っている。

（水田） それは本当にそう。

（渡辺） 一級市民というのは、イギリス帝国の支配者としてシティズンシップを共有しているということであって、ある意味ではちょっと反動的な意味もある。

（水田） そこへもう1つ、思想史の世界でポーコック〔J.G.A. Pocock〕の共和主義というのが入ってきた。これは京都〔大学〕です。田中秀夫が一生懸命言っているんだけど、僕がそれに理解を示さないと怒っている。共和主義は天皇制を認めちゃうわけですね、貴族も認めるし。それをどうするんだと言っても返事をしないのでは、どっちが反動が分からないじゃないかという話。

ポーコックはマキアヴェリあたりから共和主義というのを引っ張り出してきているんですけども、この影響はかなり強い。だけど僕はさっきみたいに、共和主義なんていうのは反動だと片付けちゃって

いるから、そのところは交流がない。人間的には付き合いはありますけどね。それがある意味じゃ、思想史をやっている人たちには共和主義が、市民社会を突き止めようという場合には邪魔になったんじゃないかと思います。

(西沢) 先ほど渡辺さんがT・H・マーシャルの話を出されましたが、T・H・マーシャルの、渡辺さんが紹介された『シティズンシップとソーシャルクラス』は、たぶんあの最初のレクチャーはマーシャル・レクチャーですね。

(渡辺) そうですね、アルフレッド・マーシャルね。

(西沢) 1949年のケンブリッジのマーシャル・レクチャーだと思うんですが、T・H・マーシャルは日本にそもそも、いつごろ入ってきたんでしょうか。対象もかなり違うような印象がありますので、高島先生がT・H・マーシャルを知らなかったというのは、そんなに違和感はないのですが。

(水田) それはそうかもしれないね。

(西沢) イギリスの市民社会というのは、むしろ今は社会史の、例えばジョゼ・ハリスとか、ペバリッジの伝記を書いた、ああいう人たちがよく言っていますね。

(渡辺) そう。

(西沢) でもそれは別にスミスとか、そういう話じゃないです。

(水田) そうだね、関係ない。

(渡辺) 僕が気が付いたのは、ソ連が崩壊する前後、つまり東ヨーロッパの方がだんだんとオーソリタリアン・レジームを脱しようとしたときに、モデルになるものは何かと考えて、そして市民社会、シヴィル・ソサエティーを復権すると言いだめたのね。ちょうどそのころイギリス本国もサッチャリズムで、非常に窮屈になっているから、それを受けて呼応関係ができるという関係が、私の気が付いたことです。それ以前は、そういう問題意識そのものがほとんどないように思うんです。

(西沢) イギリスではそうすると、例えばT・H・マーシャルのシティズンシップを展開したというか、T・H・マーシャルの最初の論文かどうか知りませんが、さっき私が言ったのは1949年か1950年ですね。ですからその後。

(渡辺) それ以前は T・H・マーシャルは住宅問題とか貧困問題とか、そういうことをやっているわけ。だから、あまり理論的なところへ行っていない議論です。だから、1949 年のその論文は非常に、マーシャルとしても画期的な議論だと思います。

ただ、あれだけ学問のジャンルにある意味ではこだわらない、たこつばに籠らないことをモットーにしていた高島さんのような人が、やっぱりそれでもある何々学という伝統の中でしか目配りができていなかった。おそらく目が見えれば、もっと自分で見ていたと思うんです。

(水田) そう、あれはやっぱり、問題はかなりそこにあるんじゃないかと思うな。

(渡辺) だからそれは、ひとえにやっぱり周りにはいる人たちがね。

(水田) そう、そういうことだけ。

(渡辺) そうサゼスチョンしなかったことが大きいと思うんです。そうね、確かに先生もおっしゃったように、ドイツからの影響は大きいでしょう。ただ、はっきりと高島さんは、市民社会概念は大塚金之助さんが日本に持ち込んだと。

(水田) うん、それはしきりに聞くね。

(渡辺) その大塚さんはドイツじゃなくてイギリスのウェブであったり、それからコールは言わなかったかな、ウェブだと言っていたんです。ドイツ的な市民社会論じゃないんだと、最後まで言うわけです。イギリス的な市民社会論だと。だからそこが、全部後知恵ですけど、亡くなっちゃって後から。

(水田) やっぱりどうしてもそうなるんだ、これはしょうがないんだ。

(渡辺) 何であのときにとと思うのは、後の祭りですけど。

(西沢) その孤立させるような、一橋の周囲の状況があったんでしょうか。

(水田) それは、ぱくられたら失業するということでしょう。それで、結局どうしたんだか、吹田順助が時間をくれていたので、それで講師でドイツ語を教えていたというのは、ぱくられたときの状況ね。だからそれは山田雄三さんとまったく違った地位に置かれちゃったということです。だから山田さん自身が、「僕は高島に悪いことをした」と。最後まで正教授になれなかった。予科教授兼教授なんです。山田さんはずっと上までいったけど、そういう違いはいくつもあったでしょうね。

それでやっぱりそういうときに、目の問題はかなり致命的じゃなかったかと思うんです。

(渡辺) そこで、いささかの反省を込めて問題提起したいのは、やはり一橋の学問は人に付くということ。人なんです。だから何々先生がやっていることをやりたいという、それが何々学であることはまったく関係なくて、あの人のように考えたい、あの人のように生きたいというので弟子たちが集まるでしょう。そうすると、そこで培養されるもの、あるいは再生産されるものは、その先生に規定されちゃう。

(水田) だからゼミナールというもののプラスマイナスということがある。それからもう1つはやっぱり単科大学だったこと、ある意味じゃ強みでもあったけれど、弱みでもあっただろうと。それからもう1つは、国立単科大学で、東京にありながら予科という変なものを持っていたということ、これが学風を規定することになっちゃったと思う。よくも悪くも。

(西沢) 山田雄三先生との違いはいつごろから、あるいはどういうふうに離れていったんでしょうか。

(水田) 卒業したのは同時期でしょう。そして、それは助手になったり副手になったり、それがひっくり返っているという。福田さんが何年だ、どこかへ行ったんだな。

(渡辺) ロシア。

(水田) うん、ロシアへ行ったとき。

(渡辺) ああ、ロシア・アカデミー。

(水田) それで後を引き受けた大塚さんが、高島助手、山田副手としたのを、福田さんが帰ってきて、またひっくり返したということがあったね。だけど、その限りは大塚さんの支持はあったわけだから、そう落胆することもないだろうし、迫害されることもなかったと思う。

(渡辺) 『新興科学の旗のもとに』へ論文を書いて、マルクスボーイだとにらまれて、そして助手ポストを要するに取り上げられると。それに対して山田雄三さんの方は、ストレートにそのまま進むわけですから、そこで挫折を味わうわけですね。そこで最初のレースの差が出ちゃっている。

(水田) 高島さんが三木清の家に行ったりなんかしていて、それで彼らは親しかったみたいだけれど。

(西沢) そうすると、それでも山田雄三先生はストレートに。高島先生は助手ポストを取られたんですでしたっけ。

(渡辺) 取られた。

(水田) ええ、そうです。

(渡辺) だから、経歴としてはつながっていないんです。ところが、つながっていないんだけど、つながったようになっているんだね。

(水田) そう、それが一種の一橋の家族主義。

(渡辺) そのつながっていない時期を、吹田さんが自分の授業を分けてやるという形で、おそらく非常勤みたいな扱いで。

(水田) そうでしょうね、非常勤。

(渡辺) 大学に残したんでしょう。

(西沢) それでは、履歴がそこで、オフィシャルには切れたわけですか。

(水田) よく見ると変なんだ。

(渡辺) そこが家族主義のいいところだと、高島さんは生前言っているわけね。ただ問題は、その弟子たちがヤマユウ〔山田雄三〕を非常に、ある種の対抗心みたいなものがあって、ヤマユウの研究分野を研究していないでしょう。ヤマユウラインのこの分野を。

(水田) うん、そっちの方はやらない。

(渡辺) やらないでしょう。

(水田) うん、経済計算論ね。

(渡辺) それからミュルダールでもいいんだけど、ミュルダールの思想研究とか、学説研究とか、そういうものへは行かないんです。

(水田) そう、ミュルダールはとにかくあれは反動だと、僕は真っ正面からやっちゃうから。

(渡辺) そう。そこへマルクス主義の左翼主義が乗ってきて、福祉国家なんていうのは、みんなあれは右翼だ反動だというので、右翼社民だ、みたいな口調で切り捨ててしまうわけです。そうすると、

高島さんのシュレーの中から、そういう社会学とか社会政策学とか、あるいは福祉国家論とかいった、要するに高島さんの問題意識を育てあげるような、そういう土壌というか、問題関心というか、それがなくなっちゃうんです。

(水田) ない、確かでない。福祉国家は買いとられた社会主義だから。

(渡辺) みんな経済学の方へ、しかもマルクス経済学の方へ集中していってしまう。そういう流れに流されてしまうわけです。

(江夏) あまり詳しくないので、その弟子たちはどういう方でしょうか。

(渡辺) いや、もう、そうそうたる弟子たち。

(水田) どうかな(笑)。

(渡辺) 水田さんを筆頭に、山田秀雄がいたり、それからその後はもう、本間要一郎、佐藤金三郎、平田清明もいるわけです。戦後の日本のマルクス経済学の市民社会派とよくいわれるんだけど、教条的なラインではない、リベラルなマルクス経済学はほとんど高島シュレーが占めている。

(土肥) やっぱり戦後という要素がものすごく大きいわけでしょう。

(渡辺) 戦後ね。そうでしょうね。

(土肥) じゃあ、昭和10年代の話をちょっとお聞きしたいんですけど。

(水田) はい。

(土肥) 今、上原さんの話も出ましたけれども、先生は入学されたのが昭和10.....

(水田) ちょっと待ってね。

(西沢) 1936年と、ここ〔資料〕にいただいて。

(土肥) 1936年だと昭和11年。

(水田) 昭和11年。そうです。



(土肥) じゃあ、上原先生の授業を聴かれたり、評判を聞かれたり、そういうことはあったと思うんですけど、どういう印象を持たれましたか。授業の印象など。

(水田) 授業そのものを聴いたのは学部に入ってからですけども、専門部に上原専禄というすごいヒューマニストがいるというのは伝わってくるという程度です。それで、授業を聴いたときは、これはもう、同じ答案を両方に出して優をもらっちゃったからまずいんだけど、そういう時代ですから。

上原さんは、講義の中では発展段階論を否定するわけです。それでこっちでは高島さんの経済学史の中でリストが出てくる。こっちで書いたことをちょっと焼き直して、優をもらったりしている。あんまり大きな声では言えないんだけど、そういう時代でした。

それから、そのころはさっき出たように、上原さんの家に平気で遊びに行っていたような気がします。

(土肥) 吉祥寺ですね。

(水田) ええ。あれは何で行ったんだろう。そうか、1つは、もっと頻繁に行くようになったのは、スミスのグラスゴー・レクチャーズを翻訳し始めて、そうするとラテン語や何かいっぱい出てくるわけです。あれはローマ法の解説が入っていますから。それで上原さんのところに何回か通った覚えがあります。

(渡辺) それは戦後ですね。

(水田) いや、戦前。

(渡辺) グラスゴー講義を出したのは戦後でしょう。

(水田) いや、やったのは1941年。

(渡辺) やったのは戦前ですか。

(水田) 戦前に仕上げた渡して、それで戦後に出した。だから、卒業前に赤字の原稿を見ました。それで、「君は1カ所、否定と肯定を間違えたね」と言われた。もう文章そのものは赤字だらけです。全体としては間違いは1つと言ったから、まあ、僕は合格した。そんなことを大塚金之助のところへ言ったものだから、ご機嫌がますます悪くなっちゃったということです。

(土肥) 戦前というか、戦後は世界史学者だから置いておいて、戦前の上原先生の話をちょっと読んでいたりするんですけども、著書になっていない論文の中で、ちょうど今日の話で『統制経済』に書

かれたりしたものが、いくつかあるんです。はっきりと大政翼賛ではないんだけど、それに近い解説をしていたり、そういうこともあるわけです。

(水田) それはありますね。

(土肥) ですからその辺と、学生が非常に尊敬していたという話と、どのようにそういうふうな、という話を少し具体的にお聞かせいただければ。

(水田) そうですね、ドイツの何か体系的な……

(土肥) 『独逸史<sup>11</sup>』

(水田) 翻訳ね。

(土肥) 中世の部分<sup>12</sup>を翻訳しているんですね。

(水田) そうです。だから我々は、「あれっ、上原さん、これで大丈夫かな」という、そんな感じが(笑)。

(土肥) 要するにヒトラーの写真のある翻訳書があるんです。中世の部分を上原さんが翻訳し始めて、著者は明らかな指導者理論で書いているような中世史です。それを翻訳されている。ページをめくったらヒトラーの写真が出てくるという、そういう翻訳書がある。

あと『統制経済』にも論文を書かれていて、これは「世界史研究の現代的意義」とか何とか、タイトルも「大東亜戦争の」という、それは編集者が付けたと思うんだけど、大東亜戦争の意義みたいな話。中も多少そういう色があるんですね。そういうのがいくつかあって。だから、学生に対して具体的にそういう発言をしているのか、それはまったく分かりませんが、書き物としてはそういうのが少し残っているんです。

だから、上原さんの娘さんが編集された著作集の中の世界史の、分厚い世界史論考みたいなものがあるんだけど、そこに入っていない。まるっきり入れる予定はないかもしれませんが。

(渡辺) だから、あの『統制経済』という雑誌は非常に面白くて、僕はどこかが復刊したらいいと思っているんだけど、一橋が全部持っているでしょう。あ『統制経済』がその当時の学生たちに与えた影響はどの程度のものですか。かなり大きいと僕は思っているんですけど。

<sup>11</sup> 新独逸国家大系刊行会編 上原専禄・小林良正訳『独逸史』(1941年11月、日本評論社)。

<sup>12</sup> ホッペ Hoppe, Willy の執筆箇所。

(水田) ええ、そうです。

(渡辺) 京都大学出身の杉原四郎が、亡くなった経済学説史家だけれども、そういうふうに書いていました。自分が学生時代唯一読めた、読むに値したものは『統制経済』だったと。あのころは東大〔東京帝国大学〕新聞も不自由になってきて、自由に書けるのはあそこしかなかったわけですから。

(水田) なるほど。

(渡辺) これは小宮山量平から聞いた話ですけど。小宮山量平はよくトキピンと一緒に編集部をやっていたから、だから、東大の先生たちがみんな喜んで書いてくれたと。

(渡辺) 大塚久雄。あの人はうなぎが好きで、原稿料代わりにうなぎを食わせればいいんですって。

(西沢) あの雑誌が続いたのは2年半ぐらいでしたね。

(渡辺) そうですね、そんなに長くないんです。

(西沢) 何年から何年でしたか。

(渡辺) 何年だったかな、いま手許に資料がないから分からない(同誌の発行期間は1940年9月～1944年4月)。

(水田) 僕の学生、本科の時代だから、そうね、だからさっきの問題になったのが昭和17年、僕がもう出て、だからその前の2～3年でしょう。

(渡辺) ちょうど在学中ですね。

(水田) そう。

(渡辺) ですから、どうだったんですか。学生の立場で見て、同じ、ちょっと先輩の学生たちが、あるいはその常盤さんと一緒に……

(水田) トキピンのあれへの反応はちょっと分からないけれども、それよりちょっと前に大阪商大と東京商大の予科の討論会があって、それで大阪へ行ったんです。そのときに1つのテーマが、統制経済と計画経済ではどっちがいいですかという、そういう話だった。それで、大阪の連中は非常に敏感、次に大阪商大事件が起こりますからね。そのときすでに敏感なのかもしれないけど、前列に特高がいたと

か、そういうことを言っていたから、どのくらい開けっ広げに話をしたかは知らないけれども、やっぱりそういう問題意識はあったんでしょう。

(渡辺) あのころはよく一橋新聞部も自分たちの編集した本を三省堂なんかから出していますね。だから出版活動をかなりやっています。もう一方に『統制経済』みたいな拠点があると。だから学内ジャーナリズムとしては2つも拠点があって、かなり対抗意識みたいなものがあったのかなと思いますが。

(水田) それはあったでしょう。だって『統制経済』は金回りがいいもの、あれ(笑)。

(渡辺) うん、素晴らしいですね、すごかったらしいですね。

(西沢) 出版はどこですか。『統制経済』って。

(渡辺) 統制経済編集所。

(水田) そこでやっちゃうのよ。

(西沢) そこですか？

(水田) 統制経済編集部が何かがやっちゃう。

(渡辺) 一橋講堂の中に編集室を持っていて、それで、用紙割り当てがかなりあったから。

(水田) そう。そうらしい。それはトキピンの腕でしょう。

(西沢) 私は最近、戦前の日本経済学会を少し調べる機会がありました。戦前の日本経済学会には、高島先生も1940年に入っておられるんですが、確か1943年ぐらいまで活動していて、それで戦前の最後の2年の共通論題が統制経済だったと思います。ですから、統制経済というのは別に非常にユニークではなく、イシューとして。

(渡辺) 時流に乗った表題でしょうね。

(西沢) 杉村広蔵さんとはどういう関係だったんでしょうか。

(水田) あの人は上海かどこかへ行ったのかな。

(西沢) 上海へ行ったんでしたかね。

(水田) 上海の商工会議所の何か、出ていったでしょう。当時から鼻っ柱が強いから、かなり敵もあったでしょうから。どうなのかな、特に理論的にどうということはないんじゃないかな。まあ、白票事件のときは、みんな我々はわあわあ言って支持したけど、それから先どうかな。

(西沢) 杉村さんも経済哲学で、ドイツですね。それで、たぶん『統制経済』にもかなり書いているんじゃないかと思うんですが。

(水田) それはそうかもしれない。

(西沢) それで、年譜を読みますと、先生が入学されたのが1936年。

(水田) うん、二・二六の年。

(西沢) 1936年はいろいろあったと思いますが、ケインズの『一般理論』も1936年ですね。それで、以前に早坂〔忠〕先生がいろいろな方にインタビューする中で、『一般理論』の熱が一橋を襲ったところというような話がありますが、例えばケインズとか、あるいはそうでなくてもいいんですが、そういう状況は当時はいかがだったんでしょうか。

(水田) それは僕には発言権がない。僕は予科でしょう。小平と国立はまるっきり違うんだ。そこで何が起っているなんて、俺は知らないよというような話で。ただし、その熱の表現としては、中山〔伊知郎〕門下の三羽がらすという、解説を書いたでしょう、一般理論を。巽博一、それから辻六兵衛、もう1人、3人とにかく三羽がらすと呼ばれて、そういう学部の学生時代か出たばかりか知らないけれども。それで中山が序文を書いてということだった、3人が解説を書く<sup>13</sup>。だから、そういう人もいるんだなというくらいは知っているけれども。

それで、その後3人とも伸びないんだ。結局伸びなかったの。一番ひどかったのは辻六兵衛。僕が補講しなきゃならないくらいひどかった。あれはどうしてか分からないんだけど、秀才だったはずだけでも、名古屋高商の教授に行って、それで新制大学になって教養の教授をしていて、講義ができなくなっちゃった。秀才が時々そういうことを起こすでしょう、でき過ぎてだめになるというのを。まあ、余計な話だけど、講義の予習をしていて、教室ができないと。それでしょうがないから全部僕が補講したと、そういうような時分。

だからほかの巽、もう1人、そういう人たちがどうなったか分からないけど、だけどそれだけの秀才を集めるケインズの魅力はあったわけ。それは一般理論の熱が一橋を覆ったと言ってもいいくらいじゃ

<sup>13</sup> 中山伊知郎編『ケインズ一般理論解説』(1939年、日本評論社)の執筆者は、巽博一・大嶋中次・深田浩三・兒島晨の4名。巽の回想録では辻がいない。

ないかな。

(西沢) 辻さんという人は、たしかロビンスの翻訳をしましたね。

(水田) 最後はね。

(西沢) それと高島先生は、渡辺さんが立てられたような側面がたぶん中心なんだと思いますけれども、例えば日本経済学会は、基本的にいわゆるマルクス主義というか、要するに階級理論を採らないということで、明らかなマルクス主義者はたぶん入れていないと思うんです。ですから、高島さんのそういう側面もあるのではないかと。

(水田) うん、それから、高島さんには一橋の一門であるという意識はものすごく強い。それで、何かの序文にそういう調子で書いてきたものだから、ヤマヒデ〔山田秀雄〕がちょっと直したことがある。

(西沢) 『経済社会学の根本問題』も、最初の方に確か、要するに自分の学問をつくったのは一橋という場だ、というようなことを書いていらっやいますね。

(水田) そう。あれが何か年表のときかな、ものすごく強く出て。まあ、それはそうには違いはないけど、そういうのが出てくると、まあ。一橋というものが、だから僕が書いた半分の自伝でも読んだ人は、隊伍を整えて東大に攻め掛かる一橋の陣営なんていう話になるわけだね。

(西沢) 孤立させる要素って、そんなにあったんでしょうか。

(渡辺) いや、学園の中では非常に孤立していて、暗い谷間を自分は歩んだんだと、はっきり書いています。

(西沢) それは？

(渡辺) やっぱり福田さんに睨まれたことが……

(水田) うん、それはね。

(渡辺) 追放され、そして吹田さんとかそういう人たちの情けで何とか首はつながったけれども、自分を理解してくれる人がいないという思いでしょう。そういう中で『経済社会学の根本問題』が売れたということは、大変うれしかったんでしょうね。

経済学会とおそらく同時だと思えますけれども、戦前には社会学会にも入っていますね。

(水田) そうだ、入っている。

(渡辺) 日本社会学会、そこで報告もしている。だからあの当時の戸田武雄だけ、ああいう社会学者から見ると、高島というのはなかなかすばらしいと、高い評価をその当時されていたはずです。

(水田) そう、戸田武雄の書評はよかった。

(西沢) 高田保馬とは全然関係なかったんですか。

(水田) 関係。というか、時間的にずれているんじゃない？ここにいたとき。白南雲〔ペク・ナムン〕は高田保馬に師事してた。

(西沢) 高田保馬がここにいたのは大正 10~13 年でしょうか。高島先生がここへ入ったのは大正 10 年ですか。

(渡辺) そこもおそらくさっきの問題、一橋の学問は人に付くというのと似ていて、要するに、ひたすら福田さんなんですね、高島さんが見ている人は。だから脇目も振らないんです。およそ、社会学が入ってこないんです、高島さんの眼中に。でもさっきの本であんなことを書きちゃったでしょう、経済社会学なんて書きちゃったから、社会学者として看板を掲げちゃったものだから、戦後に重荷になってくるんです。それで自分は社会学はできないといって、早々と定年前に辞めちゃう。そこは面白いと思いますけど。

それは大塚さんが、経済学の世界化をしなければいけないと言ったのを真正面から受けとめて、消費者中心の経済学から、どうやってそれを社会科学化するか、全精力を傾けたけれども、自分がどういう社会学をつくるかなんていうことは全然考えていない。

(水田) そうね、そうかもしれない。

(渡辺) あえて言うとならば、彼が考えた生産力の理論とか、国家論とか、市民社会論というのが、彼の社会学だといえるのかもしれないけど、それは通常いわれるところの社会学とは明らかに違っている。だから一橋の外から見ると、一橋には社会学の伝統がないというんだね。一橋には社会学がないと、僕ははっきり言われたことが何回かある。

(大月) 社会学部はあるけど。

(渡辺) 社会学部はあるけど、うん、ただあれは社会学じゃないんだ。ソシオロジーじゃない、ファ

カルティエ・オブ・ソシオロジーじゃないでしょう。ファカルティエ・オブ・ソーシャル・サイエンスでしょう。

(水田) ある意味じゃそれを狙ったんじゃないの。

(渡辺) 狙った。そのとおりです。

(水田) 社会学のボスがなだれ込んではかなわないというのもあったんじゃないかな。

(渡辺) そうかもしれません。

(金沢) 確か福田徳三が2回目の欧州留学したときに、高島先生は大塚先生に預けられて。

(渡辺) そう、預けられたんですね。

(金沢) 山田先生は戻ってきたときに福田に付いたけれども、付かなかったわけですね。

(渡辺) そう、自分は大塚さんのところに残ったと書いています。

(金沢) ですから、高島先生ご自身が福田には付かないで、大塚先生に付いたという意志がある。

(渡辺) それは自分の弱さだと言っていました。やっぱりしかられると……

(水田) ああ、そう。

(渡辺) うん、擦り寄っていけないという、そういうことです。

(金沢) ゼミですごく怒られたけれども、学年で一番優秀な人は誰ですかと尋ねたら、すぐさまその怒った学生の名を挙げたという生徒は、私は高島先生かなと思っていたんですけど。

(渡辺) そうですか。それは。

(水田) 誰、どこで。

(渡辺) 福田さんが。



(金沢) はい。

(渡辺) へえ、そういうエピソードがあるの。

(水田) いや、それは、伊坂市助なの<sup>14</sup>。

(金沢) そうですか。

(水田) それが、伊坂さんが福田さんの引用の間違いか何かを指摘したんだって。そうしたら、怒鳴られると思ったら料亭に招待されたと(笑)。それは僕が伊坂さんから直接に聞いた話。いろいろ、ちょっと今では想像もつかないことが行われていたみたいで。

(土肥) あともう1つですけれども、戦後3人追放されたでしょう。追放というか、ペケをもらったんでしょう。金子さんという……

(水田) 金子鷹之助。

(土肥) 彼は上田貞次郎の弟子で、そして最初はだから歴史をやっていて、思想史に関心があって。ただ、授業の目録なんかを見ると、上原さんと一緒に経済史をやったりしたり。でも戦争というか、末期になると、日本精神みたいな本を書き始めてという話になるんですけれども、この方はどういう方というか、印象ですか。

(水田) 兼松講堂の前に高射砲を据えてぶっ放すと言った。兼松講堂の前に高射砲を据えてぶっ放せば、学生も目が覚めるだろうと。僕の学生時代、報国団というのができる前後かな。だから、もう完全に右翼だし、それから、そのころルソーなんかをやるんですけど、原典に付かないで、評論家の評論みたいなのをやっているから、我々としては何ともしようがない、勝手におやりなさいぐらいだった。学会でも相手にならなかったんじゃないかしら。そういうタイプの学者の終わりということが、はっきり分かるような人じゃないですか。

(土肥) そうですか。ただ、昭和の1けた、昭和の初めごろは上田、大塚とともに三之助<sup>15</sup>といって。

(水田) そう、非常に派手な、活発な人です。

(土肥) 非常に学生に人気があったという話が出てきますね。

---

<sup>14</sup> 関東学院。

<sup>15</sup> 金子鷹之助(1892-1951)上田辰之助(1892-1966)大塚金之助(1892-1977)の3名を指す。

(水田) そうです。

(西沢) 上田が主宰した『企業と社会』という雑誌に、例えばトマス・ヒル・グリーンのこととか書いていると思います。

(土肥) 社会思想史、イギリス社会思想史みたいな感じですね。

(西沢) そうですね。

(水田) だから僕にとっては商売敵だった(笑)。

(土肥) そういえば『佐久間象山』とか、そういう本をいろいろ書いたり。

(水田) その当時はずいぶん活発でした。

(土肥) それで、金子さんの追悼文が『社会経済史学』にあって、それを書いているのが矢口孝次郎。矢口孝次郎さんのお弟子さんです。

(西沢) その金子鷹之助とか、そういう人も含めて、多分ある時期からかなり変わるわけですね。そういうことが顕著になるのはいつごろでしょうか。『一橋論叢』が支那事変とともにという、1938年ぐらいですね。『一橋論叢』のころは、多分そういう雰囲気はまだあまりないんじゃないかと思うんですが。

(水田) そういう雰囲気というのは。

(西沢) つまり、明らかな右傾化といえますか。

(水田) それはない。あのころはないです。だからそのころにもう、金子さんはそういう右翼的な発言を始めていたと思うけど、『一橋論叢』にそれが反映はしていないと思います。

(渡辺) そのころの学内の思想状況が分かるのは、ロシア研究をやっていて亡くなった、あの人が書いた『戦中派の遺言状』という本でしょう。

(水田) 大崎平八郎。

(渡辺) そうです。大崎平八郎、彼が非常に克明にその当時の学生時代の、誰が何を言ったということを書いています。あれはいい本ですよ。

(土肥) ああ、読んだことがあります。

(渡辺) 同業者だもんね。

(土肥) いや、同業者じゃないですけど、その本は読んだことがあります。横浜国大の。

(渡辺) そうですね。

(土肥) そうですね。

(渡辺) あれは復刊されて、国会議員に読ませたいというので、国会議員全員に配ったんです。

(土肥) そうですか。

(渡辺) どういうふうに大学が戦争に巻き込まれていったか、クロノジカルに、また、ビビッドに記録しています。

(水田) ただ彼が、たぶん僕は1年違うんだけど、彼はマルクス主義の本は絶対なかったと。冗談じゃない、いくらでもあったじゃないかと、僕は不満なんだけど。どうしてそう思うのかなと。

(土肥) 大崎さんの先生は誰でしたっけ。

(渡辺) 誰でしょう。大崎さんの先生は誰ですか。

(水田) 誰だろうね、そうね。そういえば<sup>16</sup>。

(渡辺) その当時はロシアなんかやっていないわけですね。

(水田) うん、そう。

(渡辺) 戦後ですね。戦後帰ってきて<sup>17</sup>。

---

<sup>16</sup> 佐藤弘。

<sup>17</sup> 大崎平八郎の卒業論文は「空間政策学史論 ソ連邦コムビナート化研究」(昭和17年9月)。

(土肥) そうですか。

(渡辺) 戦後だといろいろな人がいたからね。

(水田) それは案外山田雄三かもしれないし、それは分からない。山田雄三さんという人は、保身というのか何か知らないけど、一切そういう発言はしなかったから、大崎君がそこから影響を受けたとは考えられないね。

(西沢) その金子さんのように顕著に変わっていく人と、それから山田雄三さんのように、中山伊知郎もたぶんそうだと思うんですけども、要するにあまりコミットしない人と。

(渡辺) 中山伊知郎はコミットしていなかった？

(西沢) そういう発言をあまりしていないと思います。

(渡辺) 例えば、軍票を作ったのは誰か、という問題を考えてみてもいいのですが、軍票の価値を維持するために活躍した軍配組合の資料がこの図書館になぜか残っているということを見ると、あの時代の本学についてまだまだ明らかにされなければならない数多くの事実があるのではないかと思いますね。

(西沢) 軍票を刷ったのは誰でしたっけ？

(水田) あのときみんな南方占領地に来たんだ、みんな。高瀬荘太郎以下。

(渡辺) だから一橋には、明らかになっていないけど、そういう戦時中のその、要するに中国や南方についての隠された事実があるのではないか。

(西沢) 軍票というんでしたら山口茂とか、ああいう人ですよ。

(水田) うん、だからあの人はそういうことにコミットしていないし、何かどこかで言っているでしょう。このごろ町には死にたいやつがあふれている、死にたいやつは死なせたらいいと、ここでやっちゃったんだね。それで、君たちは生きて帰ってくれと。

(渡辺) そういう言い方をしたんだ。

(水田) うん。右に行けといったら左に行き、前へ行けといったら後ろへ行くと、そういうことはできないものだろうかとしやべっちゃった。ここで。送別会で。如水会の会報のどこか<sup>18</sup>に出ている。それで、さすがにそれを誰か密告するやつがいて、憲兵隊が来たらしいけれども、普段の行いがちゃんとしているものだから、それ以上問題にならなかったし、もう戦争末期だからということがあるんでしょう。山口先生はそういう人、本当のリベラル。

(西沢) そうなんですか。

(水田) 妙な話、高瀬荘太郎が行った、その前に研究所もみんな行ったでしょう。それで、それをやったのは高瀬少佐、中佐だったかな、参謀本部に弟がいた。そこから始まって、それでその陸軍全部占領したところ、どうしていいかわからないものだから、研究機関にみんなばらまこうということで。それでこの研究所がシンガポールとマレーシアか。

(渡辺) 満鉄も。

(水田) それから満鉄がスマトラ、それから太平洋協会がボルネオ。それで僕の東亜研究所が一番いいところを取ったね。行ってみたらとにかく物に不自由することがない。それは総裁が近衛文麿だったから。

(渡辺) ますます、さっきの構図で危なかったじゃないですか(笑)。

(水田) そう、そうだね。

(渡辺) そうですね、外地から呼び戻されてもう。

(水田) というようなこと。

(渡辺) 真っ先にやられちゃって。

(水田) それで、僕がその南方、ヤマヒデはそこで調査をやっていて、それで戦争に協力したという負い目をずっと思っていた。僕は一切それが無いんだ。徹底的に怠けたんだ。

それで、最後に米穀生産費のやり方をインドネシアに適用して、そのときに、実勢価格をやれば搾取は明らかになるわけね、赤字になって。それを公定価格と両方やってみて、このくらい違うんだと。そうしたら、こんな話を初めて聞いた、これをパンフレットにしようという話になったんだけど、なる前に敗戦になった。だから僕は助かったわけ。

---

<sup>18</sup> No. 810 (1997.10)

(西沢) 先生がジャワに行かれたのはどういう背景というか、理由なんですか？

(水田) まずヤマヒデがそのときに助手になった。それで、もう1人は無理だと。ヤマヒデについてもトキピンは、助手までしたけど後は知らんよという状態。高島さんは、あれは本当に悲願だったのね、山田を残すということ。その後の僕は、どこかそういうのではないかと思ったけど、普通に就職するつもりだったのね、戦争なんて全然考えないで。

就職相談で行くと、あんだ、野村に採ってもらって、外国にやってもらったらどうですかと、そんな話。それはかなわんと。それで東亜研究所に入ったら、そこに馬場啓之助がいたの。それで、彼に使われるような格好。当然試験だけど、高校の試験だけど、そこで入って、特1という、特別第1委員会というところで、アメリカの生産力の調査が来た。そうしたら、丸ごと持っていけという話になって、それで何人いたかな、20人ぐらいかな。

(西沢) その東亜研究所。

(水田) 東亜研究所から行ったわけ。

(西沢) 先生は一時期東亜研究所に行かれたのですか。

(水田) だから、卒業してそこに入ったわけ、東亜研究所に。それで1年ぐらいそこにいたわけ。そこで、アメリカの戦争経済、何も資料がないんだもの、調べようがないじゃないですか。遊んでいた。

(西沢) 秋丸機関がやりましたよね。あれは昭和15~16年頃でしたか。

(水田) いや、僕は1942年12月、安芸丸に乗ったのよ。安芸丸という船があって、それが出ていって。それで赤松〔要〕さんだったかな、赤松、石田龍次郎、板垣與一、あと誰がいたかな、現役ではそのくらいだな。

(西沢) それは皆さん一緒に行かれたんですか。

(水田) そう。誰かが飛行機で、高橋泰蔵は飛行機だな。

(西沢) 赤松要が飛行機で行ったということはないでしょうか。

(水田) 僕は確か同じ船だと思うんだけど。

(西沢) 彼はでも軍属で、将校待遇か何かで。

(水田) あれは少将<sup>19</sup>。高瀬学長は勅任教授。

(渡辺) 勅任教授というのはすごいですね。

(大月) はい、名前からして。

(水田) それで、それを上原さんは笑って。いや、もちろん怒っているんだよ。このごろ教授たちは従軍分官服みたいなのを着ていて。だから杉本〔栄一〕さんなんかは、その攻撃的になった。杉本さんは、初めは大佐待遇かな。来ているうちに勅任になったんだ。杉本閣下。それで、僕は誰かの車、本当は車に乗っちゃいけないところだけ乗って、途中で憲兵に捕まって、軍属が車に乗ってけしからんと言うから、「杉本閣下に面会であります」と言ってパスした。まったくもう。

(渡辺) 杉本閣下か。

(水田) それで杉本さんは、「この戦争は負けて、君たちは捕虜だよ」と言って帰ったんだ(笑)。

(西沢) 杉本先生はそれを甘んじて受けたわけですね。その勅任。

(水田) そう。

(西沢) 閣下という。

(水田) うん、それはまったく待遇が違っちゃうものね。そういう領域にいると。

(渡辺) でも、杉本さんは、一度特高に挙げられているのにもかかわらず、よく勅任になれましたね。

(水田) そう。それこそ高瀬中佐のあれかな。

(渡辺) ああ、そうですか。

(土肥) 勅任って何人ぐらいいるんですか。

---

<sup>19</sup> 1943年1月、大学教授のまま南方総軍の軍政総幹部の調査部長となり、初めは少将、のちに中将待遇。池尾愛子『赤松要：わが体系を乗り越えてゆけ』(日本経済行論者、2008年)の年譜を参照。

(水田) 大学でいうと上の半ダースぐらい、そんなものかしら。

(土肥) 教授の中でも勅任になると違うのですか。

(水田) 違うの、ここがぐっと違う。

(山内) それは大学教授のなかで枠が決まっていたんですか。

(水田) たぶん全体として決まっているということでしょうね。

(山内) そうですね。ちょっと話が個人的なことになりますけど、先生が学生のころといいですか、先生の伝記を読めば出ているんでしょうけど、一番先生が感銘を受けた本とか、あるいは講義。何かあったら。

(水田) うん。何だろうな。そうね、やっぱり高島さんの経済学史じゃないかしら。それでまたそれは、前の学年のヤマヒデたちが単位を取った後まで聴いていたものだから、どっちもそういう調子だった。それで、やっぱり自分の言葉でしゃべっているという感じが非常に強い。読み上げるんじゃないかね。

それで、あるとき慶応に行った学生から、君の高島先生は何によって講義しているかと聞かれて、何を言っているんだと言った。そうしたら、慶応では寺尾琢磨か誰かは、「私はケインズによって講義します」と言うんだって。それは違うと、本当の講義じゃないよという話をしたことがあるんだけど。それはかなり強い印象でした。

(山内) 先生ご自身は思想史への関心というのは、どういうところから？

(水田) マルクスの地位確認からですね。

(山内) すごく先駆的な仕事をされていますね、戦後の最初の頃。だから、その前の段階でやはりそういうのに、学生時代あたりから関心を持たれていたと思うのですが。

(水田) 何だろう。さあ。そうね、自分が思想史をやるんだというのは、何か自分で決めちゃって。

その後の話だけでも、安芸丸でシンガポールへ着いたら、本屋があるんです。それも驚いた。その中にクールトンという人の『中世思想』があって、それを買って、自分もやっぱり思想史をやるんだということを考えていたらしい。だけど同時に、ロシア語の文法書を買っているんです。すると、この戦争に負けて、ソビエトが支配して、俺はイギリス思想史をやるんだと。ちょっとあんまりでき過ぎるけれど、結局そういうことになっちゃったという感じなんです。



だから、1つは予科の雰囲気はかなり左右していると思います。いろいろな思想的な、文学的な関心、何か文学的を含めてそういう、思想というものに対する関心が次第にできていくようなところだったと思います。あまり勉強しなかったけれど、わあわあ言っているうちにそんなことになっちゃった。

(山内) ホップズが特に気に入ったというのは、何か。

(水田) 何もありません、それはまったく、変な話だけど高島さんに押し付けられた。

(山内) 押し付けられた。

(水田) いや、そうは言わないけれども(笑) とにかくいきなりなんです。テキストで『リヴァイアサン』を使うという。我々はもう予科に入ったときから『国富論』を読めといわれていますから、それを使うのは当たり前だと思っていますね。それは1年に使って、じゃあ、2年に何をを使うか。『リヴァイアサン』だといきなり言われて、それで、やっぱりこれは面白いなと思いました。

今、逆にホップズとスミスを重ねると、スミスがホップズを継承しているという感じ。それはもちろん緻密な分析としてはとてもできないけれども、ホップズは、生存権を基礎にして社会契約が出てくる。その生存権を支えるのは、スミスでいえば自然的自由の体系だということにつながってくると。そこまではいえるんじゃないかと。

(西沢) 卒論は何だったんでしょうか。

(水田) どこかそこら辺にあるよ、卒論ね。ない？

(福田名津子) でも、先生が何回も問い合わせたけど、見つからないじまいだという結論で<sup>20</sup>。

(水田) 違うよ。「生成期国民国家の思想史的研究」という。それで、つまり国民国家とナチスがいつているけど、イタリアの、だからそれはマキアヴェリだ。どこまで行ったか知らないけど、船に乗る前の日まで書いていたの。だからそれがどこか図書館にあるはずなんだ<sup>21</sup>。

<sup>20</sup> 誤り。2003年5月30日に受入れ。水田の情報によると、総量は200×1658。

<sup>21</sup> 2003年5月3日付の水田の添え状によると「この論文は1941年秋、繰越卒業のうわさとともに書きはじめられ、12月の卒業まえにはじめの部分(おそらく製本の第1分冊にあたる)を草稿のまま、『一橋文芸』と『ヘルメス』に発表された2論文をそえて、高島善哉教授に提出、学士試験合格の判定をうけた。そのご1942年12月11年の夜まで、すなわち陸軍属としてジャワへ出発するまで書き続けたものを、清書と製本をあわせて後輩に託した。ただし、製本の状況を見ると、第1分冊はそのときまでに清書、製本されていたようにおもわれる。その目次はあきらかに自筆である、第2、3分冊は不在中に清書、製本されたが、1946年6月に復員したときは、第4分冊分は草稿のままだったので、旧かな使いになれた書き手を見つけて清書してもらったのは1980年ごろだった。」

(福田) じゃあ、違います。

(金沢) 先生が佐野書院にいらした。

(水田) それは戦後です。

(金沢) 戦後ですか。

(水田) 戦後、学内で住宅獲得闘争というのをやって。そのときは特研生も組合員だったんです。

(渡辺) 研究室も高島さんの研究室を占領したんでしょう。

(水田) そう。平田と2人でやって、平田が時計を持たないで入っちゃったものだから、全然徹夜になっちゃって。そういうことがいくつかありました。

(渡辺) 平田さんみたいに理論に行かずに思想史に行くというのは、やっぱり文学青年、文学少年という背景が大きくあるわけでしょう。

(水田) そうです、それはやっぱりそう。

(渡辺) それはこの間の講演によれば、やっぱり山の手文化のなせる技だという話だったと。

(水田) そう、そういうことなんだ。それで、加藤〔周一〕と比べて、同じ年、同じ年齢なんだから、どうだと。加藤は渋谷で育って、こっちは青山で育ったから、パラレルに比較してみようかと。

(渡辺) その点、高島さんなんかは、自分は思想史をやっているように思われるかもしれないけど、学説に拠っているかもしれないけど、理論だと言うんですね。

(水田) そう、それはそう。

(渡辺) ものすごく理論に対する憧憬というか、あこがれが強い。

(水田) だから僕がいけないんだ、理論が足りないんです。それで、最初に高島さんが編集したアダム・スミスの論文集。それは僕が伝記を書いた。そうしたら、「水田君もこういうものならまあまあだね」とヤマヒデに言ったという話ですから、まあ、そんなところですよ。

(土肥) さっき、一橋には社会学がないといって話をしているけど、マックス・ウェーバーを戦前に訳した人はいない？

(水田) いや、一橋が一番早いんだ。

(土肥) 一橋ですか。誰が。

(水田) 富永祐治。

(土肥) ああ、一橋ですか。

(水田) そう、大塚さんの弟子です。富永さんは昭和4年かな。だから……

(土肥) 大阪。

(水田) 大阪市大にいた人です。

(渡辺) さっきのは、戦後のアメリカ社会学を社会学と考えているような連中の発言なんです。上田さんだってやっぱり戦前の社会学、ヨーロッパの大陸の社会学であれ、あるいはイギリスの社会学であれ、それぞれに学んでいるわけですから。

(水田) 内田義彦が、「ウェーバーは一橋が早いんだね」と言ったことがあるんです。たぶんそうでしょう。

(土肥) あと、村松恒一郎さんも何か、ウェーバーを使って論文を書いていたね。

(水田) そうです。予科のときに村松さんが講義に来て、壇上を歩きながら、「君たちにはまだ分からないだろうけど」なんて講義するんだよ(笑)。

(土肥) 早い段階で『プロ倫』か何かの論文を書いていたね。

(水田) そう。(卒業アルバムを見て) ああ、それ。これはいいよ、これは恥ずかしいからやめてくれよ。

(福田) 卒論の題名が書いてあります。

- (水田) 卒業アルバム。ああ、「生成期国民国家の思想史的研究」と書いてありますね。
- (大月) 当時の学生の皆さんが。
- (渡辺) 現物は見つからないんですか。
- (水田) 卒業アルバムで。
- (大月) 卒業アルバムであれなんですか。へえ。
- (水田) いや、僕の卒業論文もこっちに入っているはずですよ。4冊本か何かになって。
- (渡辺) この写真映りは、少年じゃないですか。
- (水田) それはしょうがないよ(笑)。
- (山内) アルバム。
- (渡辺) うん、アルバム。
- (水田) そういうものを、戦争が始まる年に作っているんですから。
- (大月) 立派な写真帳ですね。
- (山内) 「生成期国民国家の思想史的研究」か。(他学生の卒論タイトルを見て) 近代理論経済学とケインズ一般理論なんて、すごいね。
- (水田) いっぱいいる、そういう。
- (山内) これが卒論ですか。
- (水田) その蓼科の写真の端っこにいるんです。
- (西沢) 当時はサブゼミはなかったんですか。
- (水田) プロゼミがあるから、プロゼミとゼミという縦の関係はあるんだ。だけど、ちょっと今、プ

ロゼミってやったかな、いつやったかな、僕は覚えていない。そうするとあの『国富論』がプロゼミだったのかな。それで2年が『リヴァイアサン』で。と思います。

(山内) (卒業アルバムを見て)いま蓼科のを見て思い出したんですけど、妙高に町田山寮という、あれは先生がいらっしゃるころにできた。

(水田) 僕が建てたというのは変だけれど、山寮を造ろうということが出てきて、それで学生の間宮と場所を探して歩いた。ちょうど、それは町田さんがお金を出そうと意志を表明されたから。

(山内) 町田實秀。

(水田) そう。あの人が何かお金を、とにかく自分の家にエレベーターがあって、学生が驚いたら、「君のうちにはないのか」と言ったという話があるんだけど。それで、そういう錬成道場を寄付したいと。場所を探して歩いて、それがあそこに落ち着いたときに、我々は卒業しちゃったから、あとはどうしてできたか知りません。

(山内) その息子さんがやっぱりこの卒業生で、昭和23年卒だったんですね。

(大月) 町田秀春さん。村松祐次先生のゼミで学ばれた。

(山内) 村松祐次さん。その妙高のそれが今会計検査院に、使い方が足りないからどうのこうのと言われていて、どうしようかという話をしている、町田先生は私の先生の先生に当たる方なので、ご子息がいるからということで、いろいろお話を伺おうと。お話を伺っていると、先生のお話が出てきて。尾崎弴堂さん。

(水田) はい、そう。

(山内) 彼の娘さんが持っていた土地。

(水田) そうでした。

(山内) それを使って……

(水田) だんだん思い出してきた。

(山内) 別荘を造ったと。だから尾崎さんの書いた「町田君へ」という色紙みたいなものを持っている。

寄付しませんかと言ったんですが。

(大月) それをですね。

(山内) それをね、尾崎さんの色紙なんだけど。その町田山寮が残っていれば寄付するつもりだったけど、今あれは建て直しちゃっている。建て直して、古くなって、もうないんですかという話で、ダメだった。

その尾崎さんの娘さんのだんなが政治家だったらしくて、その人が寄付してくれたと。一橋新聞にはやっぱり確かに出てはいる。先生、だからそれを最初に造ったときは、使われたわけじゃないんですか？あそこに造ったらどうかという話ですか。

(水田) そう、そこまでです。

(山内) そこまでですか、なるほど。

(水田) それで卒業しちゃうわけですから。

(山内) もったいなかったですね。

(水田) そう。

(山内) 当時としては相当立派ですね、あれ。

(水田) そうですね。山寮委員会とかなんていうのを作って、それであちこち遊んで、聞いて歩いてきた。だから戦争が始まる前なのに、ずいぶんといいかげんなことをやっているね。

(西沢) 当時東京からあそこまで行くといったら、どのくらいかかったんでしょう。

(山内) すごいでしょうね。

(水田) 夜行で1晩。

(山内) そうでしょうね。この間も僕らも、現地視察が大事だといって、ここからバスを仕立てて行ったんです。それで行って帰ってきたのね。朝の9時ごろ出て行って、帰ってきたのは夜の7時ごろで、バスの運転手さんに言わせると、往復したらこの距離は東京駅から甲子園球場までの距離があると。

(水田) まあ、そうですね。

(山内) だから相当遠いんです。

(金沢) 話が飛びますけれども、一橋の箱根の寮は、先ほどお話に出た軍票の調査費を、山口先生がそっちに流用しちゃったと聞いたんです。

(水田) そう(笑)。

(渡辺) 本当ですか！

(山内) すごいですね。でも、研究費用、今だったら流用したら大変だけどね、不正使用だといわれて。本当ですか。でも、今の建物自体はその後ですか。

(金沢) 後だと思います。

(山内) そうですね。でも、あそこもいい場所ですね。

(水田) 実際に調べに行くときに、夜行で行った覚えがあります。それで、どこかの女の子と一緒に遊んで回ったり。

(山内) それはよかったですね。

(水田) ええ(笑)。

(山内) それは1晩でも2晩でも大丈夫。でも、上野から行かれたんですか。

(水田) そのときはそうです。

(山内) そうですね。

(水田) それで我々のこの記章が、女の子たちが、あれはどこの大学かしら、なんて言っているうちに仲良くなっちゃって、野尻湖でボートに乗ったりしていた。

(山内) 結構そのころでも、そういう雰囲気はあったのですか。

(水田) そうですね。元僕は津田に文芸部の雑誌を持って交換を申し込んだら、藤田たきに、さっさとお帰りなさいと言われた。一方ではそうです。

(山内) そうか、先生の雰囲気よかったんですね(笑)。

(江夏) 今日のお話を伺うと、今の大学で教えている学生の世界と、先生の学生時代はかなり違う印象です。どちらかという先生方の学生時代の話は、私たちにとっては同僚の世界の話の話を聞いているような、非常に学問的な話です。この違いをどのように理解したらいいのか考えてしまいます。当時でも、先生のまわりの学生の世界はちょっと特別だったのでしょうか。

(水田) それは、僕は誰かに言われました。何か僕のあれ〔自伝〕を読んだのが、「貴兄はそもそも極めて早熟にて」という、早熟にてと言われた。我々はそんなことは考えていなかったと言われた。だけでも、それで今、明日も会うんだけど、12月クラブという、12月に卒業した、まだ残っているんです。その連中が、君はあんなことを書いたけど、我々はあのとき分からなかったんだよ、というのは何人かいました。だから、今になって分かる能力があるんだからいいと思うんだけど、やっぱりずれているのかなと。

(渡辺) まあ、やっぱり超エリートです。今の学生を見ていると、おそらく先生の時代だったら中学生です。つまり学歴インフレですね。

(水田) それはそうね。

(渡辺) 学歴がどんどんインフレ化して、だから今先生が仰ったようなことを、もし話して分かったら、修士か、下手すればドクターに行って、ようやくそういう文献の話についていけるぐらいじゃないかな。

(山内) 昔の大学は、やっぱり今でいえば大学院レベルでしょう。それとやはり、その前の教育が違うから。全然。

(渡辺) 予科のおそらく寮生活というのは、ものすごく大きな意味を持っていたんじゃないですか。

(水田) 結局それはそうだったと思います。それにしても、もう少しいろいろなことをやればよかったと思うけれども。

(渡辺) ただ、今の生徒が自由な寮生活をすると、とんでもない事故を起こしたりしますから、だめです。



(水田) ねえ、それはだめ。

(大月) その予科時代に寮に入っておられて、そのルームメートの方々は何人ぐらい。

(水田) 寮生活といいながら、その寮生活が失敗しているのは、文部省が造っちゃうわけですよ。そうすると個室まで造っちゃうんです。僕は個室に割り当てられて何も無いわけです。だからむしろ4人部屋、6人部屋とかというのに入った方が、いろいろな。最後は同情した上級生が、自分のところへ引き取ってくれた。それはよかったと思います。そのときの室長が山代洋といって、僕の2年ぐらい上、中学の先輩でもあったわけだけど、あれは確か結局検挙されて除籍かな。除籍で、召集されて、南方へ行ってもう1回戻って、フィリピンにもう1回行って、そこで戦死してる。

(渡辺) 船が沈没ですよ。

(水田) いや。

(渡辺) 違いましたか？

(水田) 頭に実弾。だからそういう先輩がいるから、どうも僕は申し訳ないというか何というか、そういう人たちがいなかったら僕はこんなことになっていないです。何人か上級生が入った途端にアジる、何ていうのかな、直接に読書指導に来るんですよ、上級生が。それも予科に入った途端に本科のやつが来るんだから。それで「お前、『賃労働と資本』を読んでおけ」というような話。それは、そう言われればこっちは読みますからね。ということで、おそらくあの中ではマルクス、エンゲルスの初歩的な文献を一番先に知ったと思います。

(渡辺) そのころは東京出身でも寮に入れたんですか。

(水田) 全部。一年は全寮制だったんだ。

(大月) 逆に全部入れたんじゃないですか。

(水田) うん、それで、だけど入りたくないというのもいたから。

(渡辺) 僕の伯父は府立2中ですけど、入りたいと言ったけど、東京だからだめだと言われて、入れてもらえなかったと聞いています。

(水田) うん、何かそこら辺がちょっと変なんだけど、そうです。

(渡辺) 要するにケースバイケースだった。

(大月) 近いからですか。

(渡辺) まあ、そういうふうには本人は言っていた。ただ、そうね、先生も入ったんだから、東京出身だって入れるはずですね。

(水田) それで2年目にも入りたと言ったら、「マルクス主義者は入れない」と断られた。

(山内) 誰が断ったんですか。

(水田) 全寮委員会というのがあるんでしょうね。

(山内) 学生さんたちが。

(水田) 学生ですね。だいたい柔道部です(笑)。

(山内) それじゃ先生は出るしかないね(笑)。

(水田) そう。

(金沢) ずいぶん早い時代からマルクス主義に興味を持たれていたということですか。

(水田) それはマルクス主義ということじゃなくて、うちの近所といってもちょっと距離はあるけれど、小林多喜二が捕まったところなんだ。それはいろいろありますから。だいたい親父が丘浅次郎の『進化論講和』、あれを読んで社会主義になったと称している。初めからうちの雰囲気です。何をやっても、普通のうちだったら危険思想ということになるんだけど、それがありませんでした。

寮の中でそういう読書会をやったことはないから、やっぱり警戒はしていたんでしょうね。僕は寮の図書室にゴリキーの全集の翻訳を入れるとか、そんなことはやったけれども、読書会はわりにおとなしいものをしていました。

(大月) それこそ歴史研究会とか哲学研究会とか、そういった、いわば寮内サークルがあったように。

(水田) 多少分かれて、そうですね。マックス・ウェーバーを書いた、高橋何ていったっけ、僕より

2年ぐらい上の、そういうのは哲学のグループだった。それからオオタベク〔太田可夫〕さんが来てくれて、そこでいろいろなことをやっていました。

(渡辺) 依光〔良馨〕さんの名声というか、影響というのは、その当時まだ残っていますか。

(水田) 依光は検挙されて入って、それで出て、その間、抜けていますよね。だから突然依光という男が一橋寮に来たんだ。その山代が、「おい、あそこに手錠の跡を持っている男がいるよ」と、そう言って、そうしたらそれが依光だったわけ。それで、それからかな、依光がうちに来るようになったのは、何かよく来ていて。

それからもう1人、依光と同期ぐらいかしら、岡田丈夫という、これはすごいアジテーターだと思うけど。皇軍決議のときに、賛成のような反対のような、反対運動をやって。

(山内) すみません、ちょっと私、今日はもうこれで。またよろしく願います。どうもありがとうございます。失礼します。

(大月) 依光って、依光さんのお父さん。

(渡辺) お父さんです。

(水田) そう。

(渡辺) 「紫紺の闇」の作詞家でもある。

(水田) あれは、覚悟を決めて書いたんだって。「自由は死もて守るべし」なんて、前にそれで捕まったのに、もう1回かというわけ。だから、出てくるときに、いつでも戻れよと言われたとか。だけど、依光はもう1つの方が売れているからいいんでしょう。何だったっけな、その次の寮歌<sup>22</sup>。

(渡辺) そうですね。「紫紺の闇」の次の。

(水田) 次の次ぐらいで、何か親友の追悼の意味を込めた、親友の阿久津助手追悼の。阿久津さんが死んだということは、だから我々は学生時代に知っているのよ。それと依光との関係は知らなかった。

(水田) (卒業アルバムを見ながら) そう、上田貞次郎が盲腸炎で死んでという、そんなころですね。これは何だっけ。それで……

---

<sup>22</sup> 「離別の悲歌」。

(金沢) こっちは昭和 15 年です。

(水田) 昭和 15 年、うん。どこかにヤマヒデの山田夫人が出ているんだ。

(渡辺) へえ。

(水田) どこだろう。沿線風景のなか。どこかに何か変な詩みたいなのが書いてあって、よく恥ずかしげもなく書いたなというのがあるんだけど、どこかに出ているでしょう<sup>23</sup>。これは間宮〔健一郎〕が書いたんだね。ずいぶんそのころではぜいたくな仕事ですね。

(渡辺) そうですね。

(水田) (「学園の歌」を見つけて)これが僕のなんだけれども、この最後の 2 行が違うんです。委員長が書き替えちゃったの。「さらばわが学園よ 心のふるさとよ」とあるけど、僕はここ、「よ」は取ったの。ないの。「ここを過ぎて我らいずこへ 戦場へ はたまた虚栄の市へ」と書いたんだけど、これじゃ危ないというんで直しちゃった。

(西沢) それは何年ぐらいですか。

(水田) これはだから……

(大月) ご卒業の年だから昭和 16 年のはじめ。

(西沢) そうか、昭和 16 年。

(水田) 戦争が始まった年。

(西沢) いわゆる経済新体制というか、そういうことになるのは 1941 年ですね。

(水田) うん、だから学園新体制はその前だ。

(西沢) 学園新体制というのはどういうものでしょうか。

(水田) みんな報国団になるの。それで、学長がその報国団の団長かな。その自治性をつぶすわけにいかないものだから、教職側と学生の側、両方とも理事が、文化理事というのが出る。それも書いてあ

---

<sup>23</sup> 「学園の歌」のこと。

る、そこの教授側の文化理事が内藤濯なんだ。それで学生側の文化理事は僕なんだ。それで内藤が、水田君、しっかりやりましょうと。こっちはしっかりやる意思はないんだけど、こうやって握手しているわけね。そういう時代。

(西沢) そうすると、学園新体制ですか、その方が1940年とか早いわけですか。

(水田) たぶん1941年卒業だから、そうでしょうね。そう、それはどこかにあると思う。1941年か1940年か、ちょっと覚えていないけど。

(西沢) 私も以前に少し統制経済期のことに関心をもったことがあるのですが、革新官僚とか、要するに経済新体制うんぬんということが、制度的に明らかになるのは1941年だったと思うんですけども。

(水田) 片方で蓑田や何かがわめいているから、何とかしなきゃいけないということがあるでしょう。それから天皇機関説問題、いろいろあって。その前にあれがあったんじゃないかな、アカデミー何とか。

(渡辺) コムアカデミー事件<sup>24</sup>。

(水田) そう、コムアカデミー事件。それから大内検挙<sup>25</sup>もあった。だから、ここは何とかしなきゃいけないという意識はあったと思う。

(土肥) 今、先生の話を見ると、戦争が始まったのは昭和16年だからねという話をよく言いますね。ただ、最近は歴史家たちは、15年戦争とか話がアジア太平洋戦争。でも当時の実感としては、戦争が始まったのは昭和16年だと、そういう実感なんです、皆さん。それから変わるというか。

(水田) そう。

(西沢) 1938年とか1939年というのは、そういう実感はないわけですね。

(水田) うん、だからさっきの就職運動をやっていたみたいだね。その意味では、ないわけね。あちこちでぱくられた話があって、それで先輩たちがだんだんいなくなるという、そういうことはあったけれども、あとは普通に就職活動をやっていた。

それで、新聞でいろいろな人に会うと、例えば中島健蔵なんて、あれはどういうふう位置付ける。一橋新聞あたりで啓蒙運動をやりませんかと、啓蒙運動って、反戦活動をやれということね。そういう

---

<sup>24</sup> 昭和11年7月10日。

<sup>25</sup> 昭和13年2月の大内兵衛の検挙、人民戦線事件のこと。

ことは平気で言う、そういう場所があった。それからさっきの早瀬さんみたいに、インターナショナルというバーがあるから行きましょうというの。だからそういう空気を吸っていたということは、学生の仲間では少し違うのかもしれない。だから、「極めて早熟にて」なんて言われちゃうわけだ。

(西沢) 高島先生の経済学史の講義というのは、ザリーンとか。

(水田) 全然。ザリーンの直観というのはイデオロギーのことだとは言われたけど。

(西沢) 全然違うんですか。

(水田) もう初めから思想史なんだ。僕のと看は何をやったかな。毎年テーマが違ふわけ。それで、1つはリカード派社会主義をやっていたことがあったな。それからドイツロマン主義をやったり。だから、そういう、もう1つあるな、忘れたけど。

(西沢) 卒論がシュンペーターですよ。経緯はよく知りませんが、リーフマン批判で、要するに高島さんはシュンペーターの後、リストとか、それからまたスミスとかというふうになっていく。でもシュンペーター自身は、その1920年代のシュンペーターというのは、いわゆる経済社会学というか、『資本主義・社会主義・民主主義』につながっていくようなことを、中山伊知郎が留学したときもそういうことをやっていたそうですね。

1926年でしたか、「シュモラーと今日の問題」という経済社会学に、シュンペーターがかなり傾倒しているような論文を書く。そういう、そのシュンペーターをフォローするようなことは、高島さんは全然やらなかったんですね。

(水田) そうね。スミスについてもそういうふうには追究していく癖はなかったんだな。そうね、そこも1つ分からないところだな。

(西沢) ですから多分、シュンペーターが1931年に来たときにも、特に接触をするとかそういうことも。

(水田) それはないみたいね。

(西沢) 多分といいますか、高島さんの経済社会学と、シュンペーターの経済社会学は違ふんでしょうね。

(大月) せっかくですので、ちょっと写真を撮らせていただければと思うんですが。先生、ここにお座りいただいて。

(渡辺) 伊藤背水の絵でも背景に。先生、真ん中に。

(大月) 先生、1つお席を移動いただけますか。

(金沢) 高島先生は、コンサイスの日本人名録みたいなのを見ますと、社会学者という。

(水田) それが一番いい(笑)。

(金沢) 社会学者でもなかったんです。

(渡辺) いいんじゃないですか。

(金沢) 社会学者。

(渡辺) 社会学者じゃないから。

(金沢) はい。